史　料　紹　介

閣議提出案
満洲里方面ニ於ケル情況ノ切迫ハ別紙ノ如ク「チェックスロバック」軍ノ為急速且徹底的ナル救援ヲ要スル外我居留民ノ保護並軍略的要地タル満洲里及東清鉄道ヲ確保スルノ必要アルヲ以テ差當リ主トシテ満鮮ニアル部隊（兵團一師團ノ約三分ノ二）ヲ該方面ニ派遣スルコトヽ決定相成度
右請閣議
陸軍省
送達
西密第四方號
八月四日

閣議
第一
極秘
受信番號　西密第五方
件名　満洲里方面派兵ノ件
廳名　參謀本部
大臣　次官　高級副官　主計　主務副官
參事官
決裁
主務局課受領　大臣受領　大臣提出　大臣了結
主務局長　主務課長　主務課員
聯帶局長　聯帶課長
書記
主務局長
主務課長
主務課員
書記

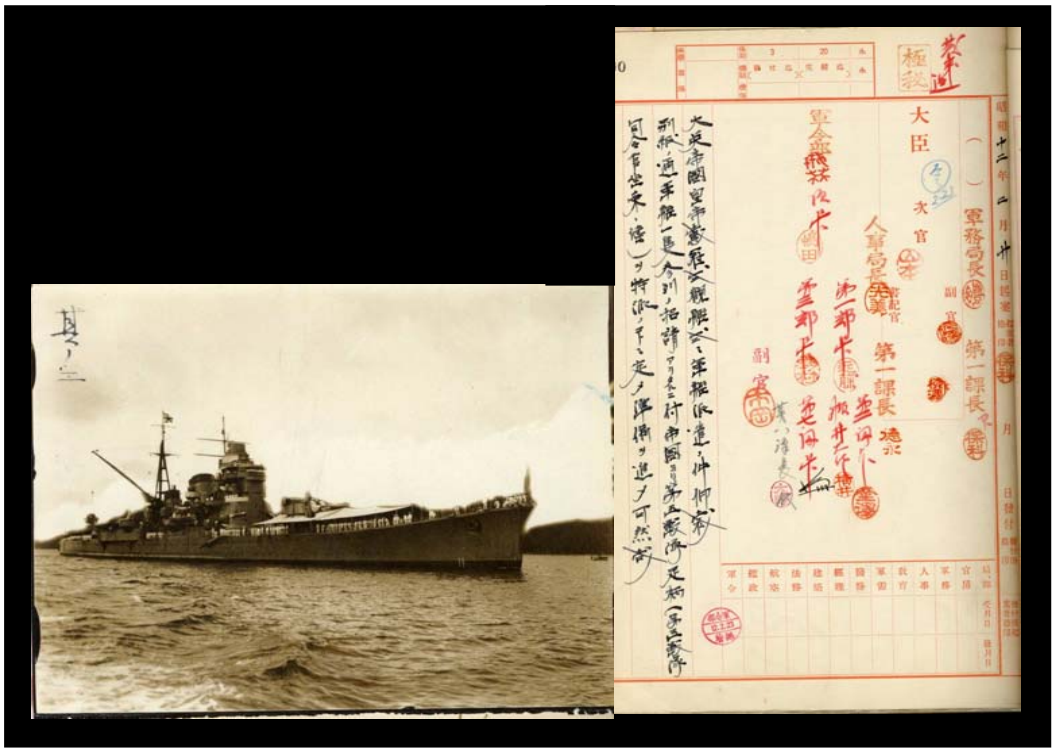
シベリア出兵９０周年

満洲里方面派兵の件（閣議提出案）

本史料は、陸軍参謀本部作成の満洲里方面派兵に関する閣議提出案であり、文書日付は日本政府の出兵宣言より２日後の 1918（大正７）年８月４日となっている。本案は、翌５日閣議において了承され満洲駐箚第７師団の満洲里派遣が決定された。これにより既に決定済みであった第 12 師団の沿海州派遣とともに日本のシベリア出兵の実行動が開始された。

日、英、米、伊、仏、中国等による連合国協同出兵は、各国の政情や思惑に基づく外交交渉を経て 1918（大正７）年８月に始まったが１年経過以降他国は逐次撤兵し、1920（大正９）年春より日本の単独駐兵となり、1922（大正 11）年 10 月の全部隊撤退により終了した。

シベリア出兵は多国籍軍による干渉戦争、対過激派戦闘、撤兵の困難さ等、90 年を経た今日にも通ずる性格を有している。本史料を所収する「西伯利出兵作戦に関する命令訓令」の綴は、冒頭の「満洲里方面派兵の件」から巻末の 1925（大正 14）年の薩哈嗹州派遣軍への参謀総長撤兵指示まで陸軍の命令訓令を網羅しており、外交史的側面から論ぜられることの多いシベリア出兵に対し、軍事史的側面からのアプローチの為の貴重な史料といえる。



軍艦「足柄」の英国観艦式派遣に関する史料

「足柄」は、1937（昭和 12）年５月 20 日に挙行された英国王ジョージ６世の戴冠式記念観艦式に派遣され、帰途ドイツのキールに寄港している。本件に関する史料は、主に「昭和十二年　公文備考　C　儀制　巻一の四」中に「英國戴冠式遣英艦（足柄）関係」として編綴されている。上掲の文書は、英国政府からの参加招請を受けて、「足柄」派遣について時の海軍大臣米内光政の決裁を仰いだものである（本誌 44 頁参照）。海軍軍縮無条約時代の初期に実施された「足柄」の派遣は、日本海軍がそれまでの親英から親独へと傾斜する象徴的な出来事であった。

なお、起案者の軍務局第一課長の保科善四郎大佐は終戦時の軍務局長で、戦後野村吉三郎元大将、山本善雄元少将らとともに海上自衛隊の創設に尽力した。

「足柄」の写真は、佐世保帰国時に新聞報道のため撮影され、海軍当局の検閲を受けた際に没収された３枚のうちの１枚である。没収理由の記載はないが、何れも背景の一部に修整・削除の跡が確認できる（本誌 55 頁参照）。